

## 「国際学術交流研究会 グローバル化のなかの 市民社会と公共空間」の特集にあたって

篠田 武司\*

これは、2001年1月11日に行われた国際学術交流研究会「グローバル化のなかの市民社会と公共空間」(主催:産業社会学会/人文科学研究所)の記録です。本研究会に参加されたシャンタル・ムフ女史とボブ・ジェソップ氏は、もともと2日後に東京大学で開催された国際シンポジウム「グローバル化の時代における市民社会」(ヨーロッパ政治学会と日本政治学会・政治理論部会による研究交流の一環として開催)に参加するために来日されたものであります。そして、本研究会は、このシンポジウムを開催された主催者の好意によって立命館大学にも両研究者をお呼びすることができ、開かれたものであります。

といっても、偶然に当大学で両者をお呼びすることになったということではありません。ジェソップさんが報告の中で話されているように、立命館大学とジェソップさんとは少くない研究上の縁があり、そのことが今回の研究会開催につながりました。私たちは、産業社会学部を中心として「産業社会の変容と市民社会の再生」と題する国際共同研究を1996から3年間にわたって行ないました。この研究会を立ち上げる際、私たちの共同研究の相手として真っ先にあがったのはジェソップさんでありました。1994年度から、私ども産業社会学部では客員教授として故平田清明氏をお呼びしたのですが、氏の晩年の仕事がほかならぬ現代に市民社会概念をあらためて再生させることであったことはよく知られています。そして、氏がその手がかりとしたのは、グラムシであり、またかれやプーランツァスに依拠しつつ経済と社会と政治、そしてそれを総括するものとしての国家、それらの分節と連節構造(コンフィギュレーション)をより精緻化したジェソップさんでありました。平田氏は日本で、最もジェソップ氏を評価した人だと思えます(参照、「特集:追悼 故平田清明客員教授」『立命館産業社会論集』31巻4号、1996年3月)。氏との学部共同研究会などを通して、私たちはそのことを理解しました。したがって上記の国際共同研究を立ち上げる話が現実化したとき国際共同研究者としてジェソップさんを迎えるのは私たちにとって自然なことでありました(私事になりますが、私自身も93年のイギリスでの海外研修の際、ジェソップさんとは親しく議論させていただきました)。

---

\* 立命館大学産業社会学部教授

この国際共同研究の内容については、1年目が「特集：産業社会学部国際研究交流シンポジウム - 産業社会の変容と市民社会の再生」（『立命館大学産業社会論集』32巻4号、1997年3月）として、2年目が「特集：産業社会学部・学部セミナー 市民社会と国家の諸問題」（『立命館大学産業社会論集』34巻1号、1998年6月）としてまとめられています。1年目のシンポジウムでは、A・アラート/J・コーエン氏にも論文参加（「市民社会概念の生成・衰退・再構築と今後の研究のための指針」）をお願いしました。また、3年目にはジェソップさんのランカスター大学の同僚で、また高名なJ・アーリ氏（「グローバル市民社会とメディア」）、A・セイヤー氏（「モラルエコノミーと政治経済学」『立命館大学産業社会論集』35巻1号、1999年5月）を招き同じくシンポジウムを行いました。

ジェソップさんとは、こうして3年間にわたって研究交流を行ってきました。この間、氏の見解は「国民国家の将来：政治の脱国家化および市民社会の統治化に対する諸限界」（32巻4号）や、「国民経済と国民国家の将来とは？ レギュレーションの再構成とガバナンスの再発見に関する短評」と「市民社会と国家の諸問題に寄せて」（34巻1号）にまとめられていますが、こうした縁が今回の国際学術交流研究会の開催となりました。

私たちは、上記の国際共同研究会を立ち上げる際、いまあらためて市民社会の再生を議論すべき時代を迎えていると考えました。情報技術がもたらした労働や経済面など産業社会の様々な変容と、新自由主義的グローバリゼーションがもたらしている社会的格差の拡大や国家の衰退、あるいはアイデンティティの崩壊や民主主義の衰退は、いまあらためてあらたな調整様式、いいかえればガバナンス構造を生み出してもいるし、また必要ともしていること、あるいはあらたな社会的規範や正義を必要ともしていると考えました。そして、そうした議論を展開する際、私たちは社会の一つのオルタナティブとして市民社会の概念を現代に再生させることがきわめて重要だし、有効だとも考えました。欧米では、新自由主義的グローバリゼーションへのオルタナティブとしてすでに市民社会論がドイツを中心として生まれてきていましたし、アメリカでは国家と市場に代わる第三のガバナンス領域として第三セクターを重視するなかからアラート等の市民社会論が生まれてきていました。振り返ってみると、日本においては、すでに戦後いち早く市民社会論は日本資本主義がもつ独特な国家主導型構造を、いいかえれば内田義彦という個人を飲み込んでいくような超資本主義的構造を批判する視座として議論されてきました。それが、70年代以降に顕著となる日本資本主義の企業主義的構造（企業社会）をあらためて根底的に批判する視座としてあらためて再指定されつつあると考えました。

このように、市民社会論が、いまあらためて西欧で、あるいは日本で議論となりつつある（もちろん発展途上国でも市民社会論がきわめて重要な位置を持ち始めています）なか、概念のインフレ傾向も見られ、議論は少々混迷しつつあることも確かであります。しかし、繰り返せば、この視座は現代社会への根底的な批判を提供し、同時にまた新たな社会の枠組みとして積極的に生きる概念でもあると私たちは判断しています。特に、ほかならぬ日本で、日本の社会のあり方を考えていく場合、この概念のもつ意味は決定的だと考えます。国際共同研究は、このような問題意識の中では

じまったのですが、しかし、当初、ジェソップさんとは、市民社会の位置付けをめぐる議論が食い違っていました。氏は、国家理論家として、むしろ市民社会概念を使用することには禁欲されていました。また、日本の研究者がしばしば市民社会と企業社会とを同時に論じることを奇異に感じられてもいました。しかし、今回の氏の報告の中でも触れられているように、この点、私たちは多くの議論をおこない、氏自身、市民社会を一つの社会の層としてより積極的に位置付けられるようになってこられたかに見えます。

したがって、今回、氏があらためてどのように市民社会論を現代社会分析に生かそうとされているのか大変興味があるところであります。また、ラディカル・デモクラートであるシャンタル・ムフさんが市民社会概念をどのように捉えられているのか、またこの概念がムフさんにとってラディカル・デモクラシー論を構成する一要素として位置づけるのかどうか大変興味があるところであります。少なくとも、ムフさんはこれまで、積極的に市民社会について語られてはこなかったからです。また、伊藤武夫氏が日本における市民社会のありようを論じた「日本における市民社会の多元性」が、どれだけ両者に理解されたかも興味があるところであります。これらの結果については、本報告を読んでいただきたいと思います。

なお、本国際学術交流研究会の開催にあたっては国際基督教大学の千葉眞氏に大変大きなお世話をいただきました。感謝申し上げます。また、当日の通訳に経営学部の原陽一先生をお願いしました。氏の極めて明快で流暢な通訳には全く感服するばかりであります。あらためてまた感謝する次第でございます。最後に、長田豊臣立命館大学総長からも御挨拶をいただいたこと、また、多くの参加者がえられたことも主催者としてはありがたく、お礼申し上げます。なお、全体の総合司会を中谷義和（法学部教授）氏をお願いいたしました。

ここに掲載された報告は、すべて御本人の了解をとって掲載されています。またジェソップ氏の報告については英文をそのまま掲載させていただきました（当日の報告は、本文のようにこれとは別個の形でなされました）。記して、謝辞とさせていただきます。なお、評論部分等の編集の責任は篠田が負っております。最後に東京でのシンポジウムでのムフさんの報告は「グローバル化と民主主義的シティズンシップ」（『思想』5月号/2001年）として邦訳されていることを付記しておきます。あわせて読んでいただければと思います。